

景観形成の基本原則と構成要素一覧

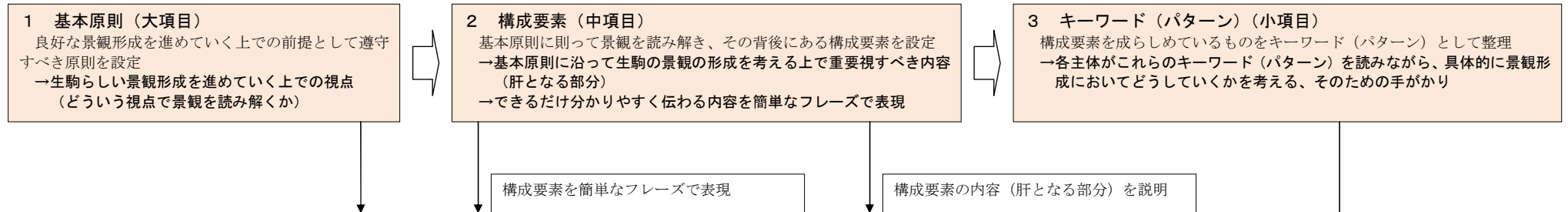
景観形成の基本原則	構成要素	キーワード（パターン）
1. 地勢と場所性 地形の骨格を認識し場所性を尊重する	（１）尾根筋がつくる骨格	○骨格となる生駒山系と矢田丘陵 ・生駒山系の高い峰や広がる山麓と、矢田丘陵のゆるやかに連なる緑の帯が、景観の土台をつくっている ○図としての生駒山系 ・山肌が急峻な斜面を形成し、かつ山頂が突出した「山」としての形状をなしていることから、シンボル性が高く、図として認識される ○地としての矢田丘陵 ・帯状に連なる緑のエッジとして、谷の空間を成立させる要素となっている
	（２）流域ごとに固有の谷空間	○地形に起因し異なる流域ごとの景観 ・流域ごとに特徴的な地形となっており、景観も異なっている ○天野川、山田川の中構造
	（３）聖なる生駒山	○遷移する場所性 ・生駒山の神聖な空間と、谷の生活空間とを隔てるバッファのように、中腹には寺院群が帯状に立地している ○信仰の対象、修験の場としての生駒山の求心性 ・生駒山は遥拝の対象となってきた。巨岩が露出する奇異な姿は見るものに畏怖心を感じさせ、修験の場ともなっている
2－1. 歴史・文化の文脈 歴史・文化の文脈を受け継いでいく	（１）大地と一体となった集落	○地形の凹凸を表現する、連なる屋根並み ・集落の下方から見上げる時、上方から見渡す時に、集落は地形の凹凸と一体として感じられる ○ミチに寄り添うイエ ・緩やかに曲がりくねる道と、道に沿って配置される塀や建物が、地形を表現している
	（２）信仰や生活によって成り立つ空間	○生活の根底に流れる信仰の風景 ・御堂や寺、モリ、墓などが集落内や集落の境界にあり、一つ一つが固有の物語を有し、言い伝えられている ・これらが大切に守られている姿は、集落の共同空間の景観を構成する要素となっている ○日々の暮らしが編む生活の風景 ・集落の共同空間では、住民らが機能を共有して利用していた。これらは人が集まりやすい場所にある ・日常的に人が集まり、社交の場となっていた
	（３）受け継がれる伝統的な要素	○受け継がれる暗黙の認識 ・地域の中で語り継がれてきた、言外の認識が暗黙のルールとなっており共有されている ○年月を経て洗練された形態と意匠 ・材料と、風土に合った建築の技術が、固有の形態や色彩をつくり出す。調和のとれた景観を形成する要素となる ○ナカとソトを緩やかに区切る敷際 ・生活感がソトに伝わり、ソトの気配がナカから透けて見える敷際は、個々の生活と公共空間での動きのやりとりを可能にしている

景観形成の基本原則	構成要素	キーワード（パターン）
2－2. 市街地開発の文脈 市街地開発の経験に学び蓄積を活かす	（１）骨格となる地形との対話	○山あて ・通りの先に生駒山や矢田丘陵が見えることが通りに方向感覚を生み出し、それはまちのアイデンティティの形成にもつながる ○眺望 ・市街地への俯瞰や屋根越しに見渡す生駒山への眺望は、骨格となる地形を視覚的に感じさせる
	（２）通りの空間尺度	○通りの骨格 ・道路空間と敷地のセミパブリックな要素が通り空間の骨格となる ○道路と建物のプロポーショナル ・道路及び敷き際空間と建物の高さのバランスが通りの均衡をつくる ○道路と擁壁の関係 ・道路と擁壁の関係は通りの街並みを支配する
	（３）敷地の表情	○通りの方向感覚 ・斜面方向との関係や方位によって両側で異なる敷地の表情が通りの場所性を際立たせる ○敷地面積と緑化 ・敷地の複数の面にボリュームのある緑を配するためには一定の敷地面積が必要になる ○時代性の表出 ・擁壁のしつらえや敷地の外構には開発された年代の時代性が表出する
	（４）人々を迎え入れる駅前空間	○第一印象を決めるまちの“顔” ・駅は市外から訪れる人にとってそのまちの第一印象を決めるまちの“顔”であり、市街地再開発事業等を核に一定のコンセプトに基づいて景観形成が行われている ○駅を核とした連歌式の景観 ・一定のデザインコードに基づき、地区の景観を特徴付ける駅舎・駅前広場等が整備されている。さらに、その景観に即した・調和した形で隣接する建築物等も連歌のように連鎖的に計画・建設され、地区一体で統一的な景観を形成している
2－3. 境界の空気 境界が醸す空気を読み調和させる	（１）機能的な幹線道路の空間	○通りを意識した連歌式の景観 ・沿道の景観の特徴、雰囲気 に即した・調和した形で隣接する建築物等も連歌のように連鎖的に計画・建設され、沿道の景観の統一感を演出している ○結節点 ・市域と幹線道路の交わる場所は、来訪者の印象を左右する。 ・道路同士が交わる場所は、焦点として人の流れが集中し、印象を左右する。 ・幹線道路沿道の橋の上などから、竜田川、生駒山系などの眺望が見晴らせる場所がある。 ○情報の整理 ・屋外広告物は得てして突出しやすいが、情報を整理し、かつ景観になじませる作法を採り入れているものがあり、結果として店舗の個性の効果的なアピールにつながっている ○緑のしつらえ ・敷き際に緑を配置し、沿道景観に潤いを加えている

景観形成の 基本原則	構成要素	キーワード（パターン）
	（２）商店街の親密な空間構成	○公と私の中間領域 ・商店街の道路（公）と店舗（私）の間の中間領域で、商品を陳列したり、ディスプレイで演出したり、商店主が客とコミュニケーションを取るといった行為がなされ、にぎわいを創り出している ○参詣の記憶 ・参詣者をおもてなしする門前町としてのたたずまいが残っており、現在も継承されている
	（３）駅を中心とした日常のゲート空間	○通勤・通学の住民を迎え入れるなじみの雰囲気 ・鉄道からの車窓の景観、駅から降り立った景観を認識して、「帰ってきた」という気持ちになる ・駅や沿線からの眺望や、駅から住宅地・集落への接続する空間のしつらえなどが、そのなじみの印象を左右する ○駅前のしつらえ ・駅前のロータリーは機能的であるがゆえに無機質になりやすいが、植栽やシンボルツリーなどを添えて、緑のしつらえで印象を軽減している
３．暮らしの営み 暮らしの営みが つくる風景に目 を向ける	（１）生業の風景	○農業の風景 ・平地に広がる農地や斜面に沿った棚田が背後の里山や集落の居住空間と相まって農の風景を作る。農の風景は季節によって異なる表情を見せる。 ○伝統産業の風景 ・茶筌や竹器の材料となる竹の寒干しが茶筌の里ならではの、また古くからの造り酒屋が地域に固有の伝統産業の風景をつくる。
	（２）仮設の風景	○年中行事の風景 ・定例で執り行われる年中行事が日常の風景をハレの風景に変える。 ○儀礼の風景 ・暮らしの中の節目で執り行われる儀礼が暮らしの場を特別な場所に帰る
	（３）身近な環境に関わる活動の風景	○環境改善のアクション ・環境美化や自然保全の活動が身近な環境を改善し景観の質を高める。 ○アクションのきっかけとなる意識 ・自らの暮らしと身近な環境の関係に気づくことがアクションのきっかけとなる。
	（４）人々の原風景	○風土への思いを伝える校歌と校章 ・後世に伝えていきたいふるさとの風土への思いが校歌や校章に託されることがある。 ○語り継がれてきた地名 ・人々が土地に対して抱いた印象や思いは地名として語り継がれる。 ○名所の風景 ・誰もが美しいと感じ、また魅力を感じる典型的な風景がある。

生駒の景観形成の基本原則・構成要素シートの見方

生駒の景観の特性（生駒らしさ）の本質にできうる限り奥深く迫っていき、なぜ良好な景観形成を進めていくのか、その心となる部分を共有するため、基本原則と構成要素、キーワードにより生駒の景観の読み解きを行った。



景観形成の基本原則
2-2 市街地開発の文脈

(1) 骨格となる地形との対話

1960年代に生駒谷の谷筋の平地部から始まった住宅団地の開発は、年代を経るにつれ生駒山麓や矢田丘陵の斜面地などの標高の高いエリアに広がっていきました。こうした開発によって、骨格となる地形と対話するように、視線の先に山が見える通りや眺望の開ける場所が生み出されてきました。

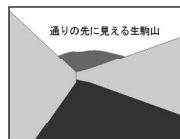
○山あて
・通りの先に生駒山や矢田丘陵が見えることが通りに方向感覚を生み出し、それはまちのアイデンティティの形成にもつながる。



さつき台



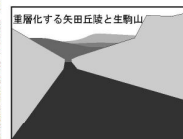
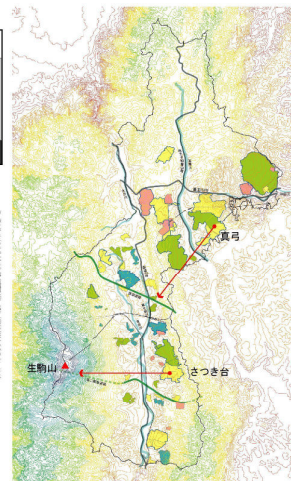
真弓



通りの先に見える生駒山



生駒山へ向かう通り



重層化する矢田丘陵と生駒山



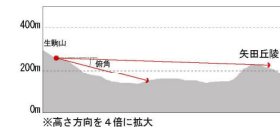
矢田丘陵と生駒山へ向かう通り

○眺望
・市街地への俯瞰や屋根越しに見渡す生駒山への眺望は、骨格となる地形を視覚的に感じさせる。



光陽台

- ・市街地を俯瞰できる公園からの眺望
- ・傾角が小さく自然な広がりを感じる
- ・矢田丘陵の縁の帯が見える

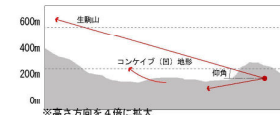


※高さ方向を4倍に拡大

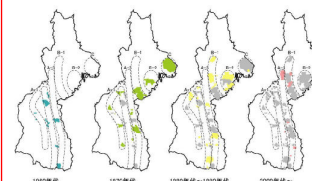


南山手台

- ・住宅の屋根越しに見る生駒山
- ・傾角が比較的大きく存在感がある
- ・コンテンプ（四）地形で興行きを感じさせる



※高さ方向を4倍に拡大



年代による住宅団地開発の動向

- 1960年代 生駒谷の谷筋の平地部を中心に、一部や田丘陵の西向き斜面などで開発がはじまる
- 1970年代 矢田丘陵の西向き斜面、生駒山麓の東向き斜面での中小規模の開発、富雄川流域の斜面や山田川流域の南向き斜面などでの大規模な開発が進む
- 1980～90年代 1970年代の立地傾向がさらに進むが、比較的高標高の高いエリアでの開発が少くなる
- 2000年代～ 矢田丘陵の西向き斜面や東向き斜面を中心とする中小規模の開発の他、山田川流域の南向き斜面でも開発が進む。

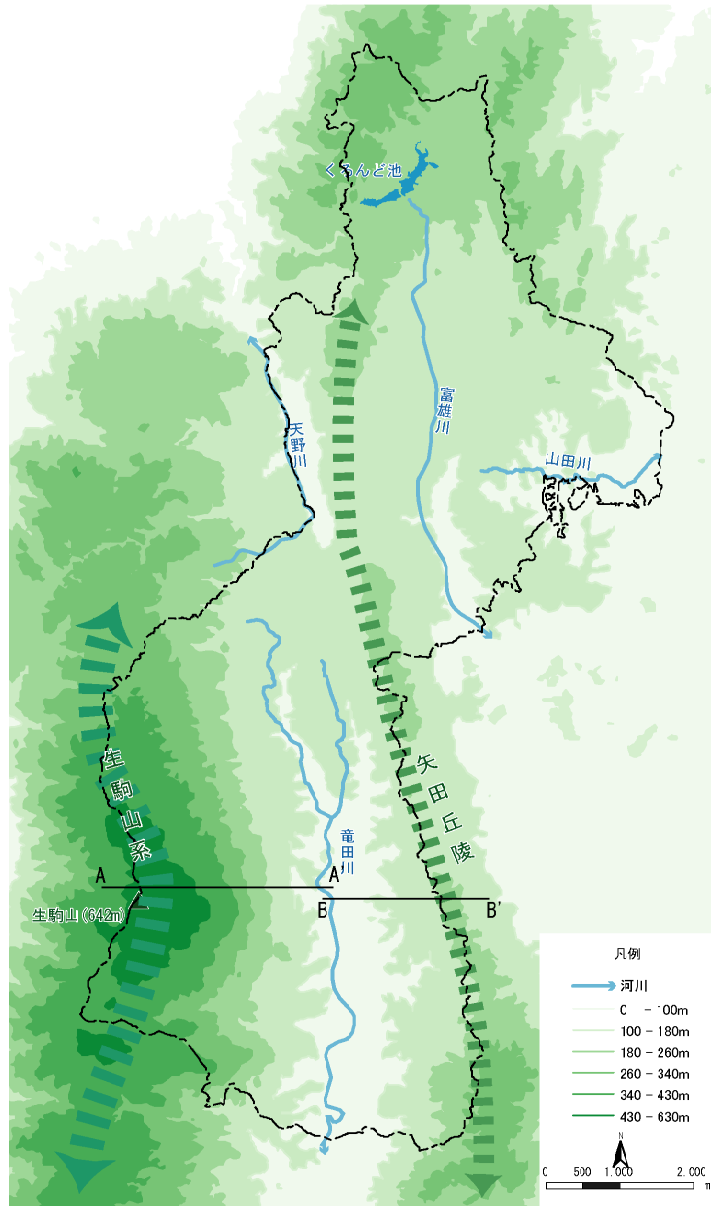
景観形成の基本原則
1 地勢と場所性

(1) 尾根筋がつくる骨格

視認性のよい生駒山系と矢田丘陵の尾根筋が景観の骨格となっています。生駒山系は目を引くシンボリックな姿を示し、矢田丘陵は緑の壁として背景的な役割を担っています。

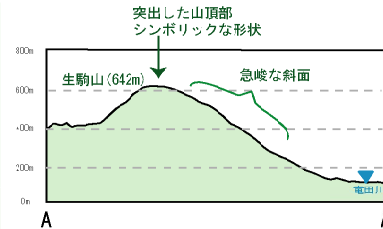
○骨格となる生駒山系と矢田丘陵

- 生駒山系の高い峰や広がる山麓と、矢田丘陵のゆるやかに連なる緑の帯が、景観の土台をつくっている



○図としての生駒山系

- 山肌が急峻な斜面を形成し、かつ山頂部分が突出した「山」としての形状をなしていることから、シンボル性が高く、図として認識される



南山手台付近から望む生駒山



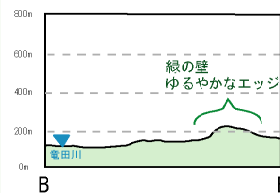
萩の台付近



西菜畑町

○地としての矢田丘陵

- 帯状に連なる緑のエッジとして、谷の空間を成立させる要素となっている



生駒山山麓から矢田丘陵を望む



暗峠奈良街道の藤尾町付近から望む

北田原町

景観形成の基本原則 1 地勢と場所性

(3) 聖なる生駒山

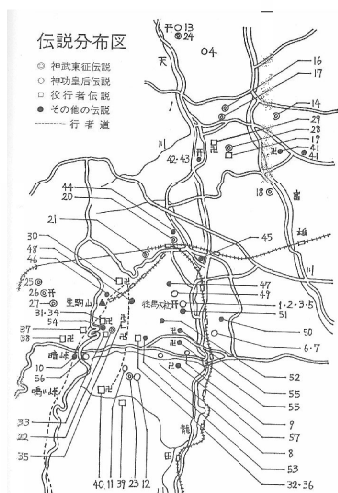
生駒山は古代から霊山として知られ、遥拝の対象となってきました。宝山寺から山腹にかけての奇岩が露出する姿は畏怖を抱かせ、行者が修験を積む場でもありました。その雰囲気は今もなお残り、人々の心を惹きつけています。

○遷移する場所性

- ・生駒山の神聖な空間と、谷の生活空間とを隔てるバッファのように、中腹には寺院群が帯状に立地している
- ・これらを直線的につなぐ道は、古くは修験者が駆け巡って修行する空間であった

○信仰の対象、修験の場としての生駒山の求心性

- ・生駒山は遥拝の対象となってきた。巨岩が露出する奇異な姿は見るものに畏怖心を感じさせ、修験の場ともなっている

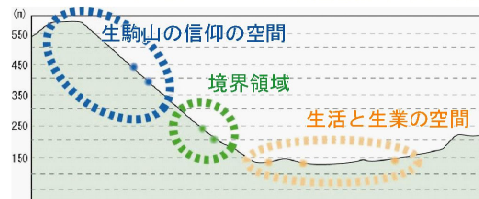
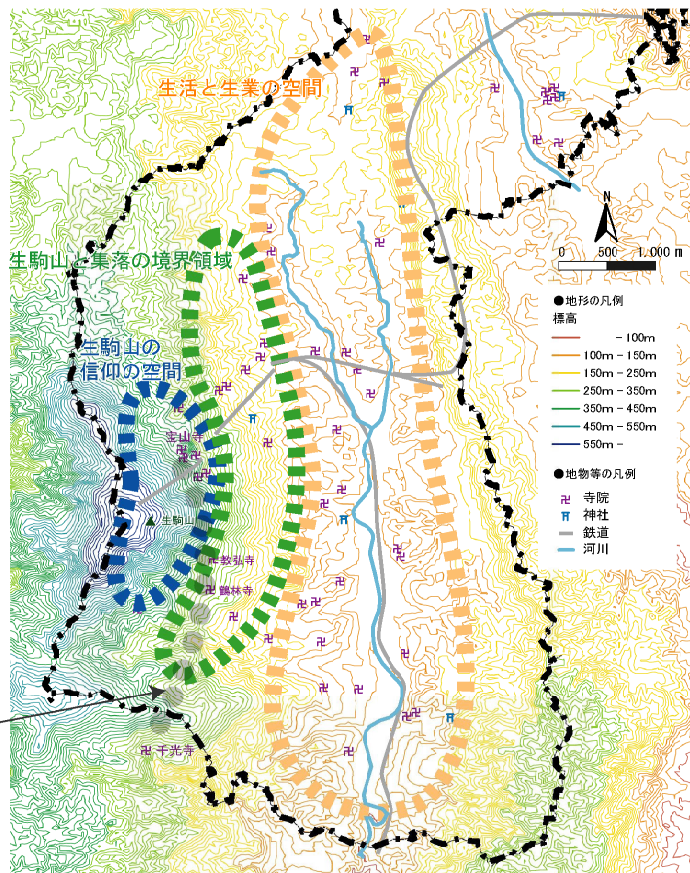


役行者伝説の分布
(「生駒谷の祭り」と伝承、桜井満、伊藤高雄編)

生駒山の山頂から中腹にかけて、宝山寺、教弘寺、鶴林寺などの、役行者を開基とする寺が多数立地する。そして、これらの寺と関わる形で、役行者伝説が分布している。

・行者道「庄平道」

宝山寺から南下して教弘寺・鶴林寺の前を通り、平群町の千光寺に至る、生駒山中腹を直線的に結ぶ道。江戸時代に湛海律師（たんかいりっし）の名を受けて、見取村の庄兵衛が整備したもので、古くは修験者が山中を駆け回って修行する空間であった。



【生駒山の山頂を中心とする空間】

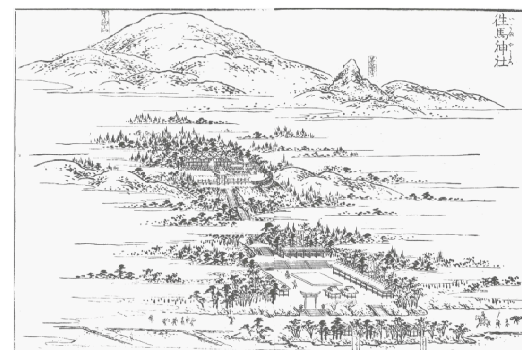
- 一 生駒山の神聖な空間
- ・古来から修験者の修行の場であり、神聖な空間。
- ・概ね標高350m以上。

【生駒山の山麓の空間】

- 一 生駒山と集落の境界領域
- ・生駒山と集落の境界領域に、帯状に寺院が立地している空間。
- ・概ね標高150～350m。

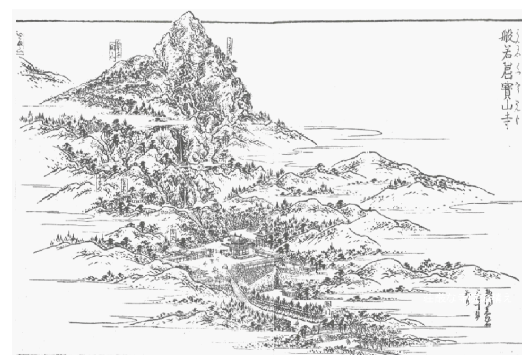
【生駒谷の平地の空間】

- 一 生活と生業の空間
- ・河川沿いに農地が拓かれ、集落が形成されてきた空間。
- ・概ね標高100～150m。



河内名所図会に描かれた往馬大社と生駒山

往馬大社は、生駒谷にある十七の郷の氏神社である。御祭神である伊古麻都比古神（いこまつひこのみこと）、伊古麻都比売神（いこまつひめのみこと）は火を司る神として、昔から天皇の即位式に火きり木を献上していた。（市誌資料編Ⅲ）生駒山への信仰を背景として創祀され、山頂からちょうど東の方向に位置する。創建は明らかではないが、奈良時代にはすでに、現在の地に鎮座していたと考えられる。



大和名所図会に描かれた宝山寺

役の小角（えんのおずめ）は吉野の天峯山や金峯山などの山上山を開く前に、この往馬山系の千光寺を足がかりにして宝山寺の般若窟や鬼鳥の般若岩谷修行して靈力を体得したと伝えられている。その後、般若窟は宝山寺が開かれるまで修験の行場として、また、鬼鳥山の般若岩屋も修験道発祥の霊場として知られるようになった。生駒山のこうした霊場はいずれも巨石・巨岩が露出する奇異な畏怖心訪れた者に抱かせる結界にあり、今日でも祈禱師などが籠る修験の場として知られる。（「生駒谷の祭り」と伝承）桜井満、伊藤高雄編



往馬大社



宝山寺



現在も修験の跡が残る